フェルゼンライトシューレで演奏するデュトワ指揮N響（8月26日）©Wolfgang Lienbacher

Debut ! Charles Dutoit&NHK Symphony Orchestra in Salzburg Festspiel 2013

—REPORT—

鳴り止まぬカーテンコール！

シャルル・デュトワ＆N響、ザルツブルク音楽祭にデビュー

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

8月26日フェルゼンライトシューレで、シャルル・デュトワ率いるNHK交響楽団がザルツブルク音楽祭デビューを飾った。

武満徹《ノヴェンバー・ステップス》で始まったコンサート会場は、初め落ち着きがなかった。物珍しさで来ている聴衆もいたのだろう、演奏中も声高に話をしたり、琵琶と尺八のソロで嘲笑するなどの無礼な面々もいたが、彼らすら黙らせる程の気迫で音楽は進み、演奏が終わると満場の拍手が湧き起こった。

舞台上の転換が大変長かったが、てきぱきと無駄のない動きをするステージマネージャー達のプロ意識がかろうじて聴衆の忍耐力を支えていた。

そして続く細川俊夫の《嘆き》は当音楽祭の委嘱作品で、世界初演であった。デュトワが「細川さんは自分の曲が果たしてそのままの印象で演奏されるか心配そうだった」と分析していたが、細川がインタヴューで語ってくれた通り、壮大な海を表現するオーケストラとシャーマンの役割を果たしたソプラノのアンナ・プロハスカの超人的な歌唱で、自然の脅威と人間の虚無感を表して成功を博した。

休憩をはさむと一転して舞台は西洋となり、せつなく儚いフレージングで《幻想交響曲》が始まった。デュトワがインタヴューで「優雅で色彩に富んだ音」と満足気に語ってくれたように、N響は完全にフランス的だった。自由自在に操るテンポ、強弱、優しさ、切なさ、荘厳さ、邪気、すべてが鮮やかに表現され、人形劇を観ているような気分にさせる演奏だった。

カーテンコールでは何度も呼び出され、アンコール後もコールは続き、最後にデュトワが手を振ってみせるまで、聴衆は帰る気配を見せなかった。

ザルツブルク音楽祭からの委嘱作品、細川俊夫「ソプラノとオーケストラのための《嘆き》」のステージから。"超人的な"歌唱を披露して喝采を浴びたソプラノのアンナ・プロハスカ ©Wolfgang Lienbacher

シャルル・デュトワ
Charles Dutoit（指揮者）

1936年、ローザンヌ生まれ。ローザンヌとジュネーヴの音楽院で指揮、ヴァイオリン、ヴィオラ、打楽器、作曲を学ぶ。タングルウッド音楽祭でシャルル・ミュンシュに師事。64年にカラヤンに招かれウィーン国立歌劇場で指揮。67年から78年までベルン響首席指揮者。67年から71年までチューリヒ・トーンハレ管でルドルフ・ケンペのアシスタントを務める。73年から75年にメキシコ国立響を、75年から78年までイェーテボリ響の指揮者を兼務。77年から2002年までモントリオール響音楽監督。1990年から2010年まで、フィラデルフィア管のサラトガ・フェスティヴァルの芸術監督を務める一方、2000年から3年間、パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）でも芸術監督を務めた。91年から2001年までフランス国立管音楽監督。08年から12年までフィラデルフィア管首席指揮者、09年からはヴェルビエ祝祭管音楽監督、ロイヤル・フィルの芸術監督を歴任。

96年からN響常任指揮者、98年から同音楽監督。2003年6月に音楽監督を退任。同年9月から名誉音楽監督に就任。現在に至る。